

安野フィールドワークの報告

東広島九条の会世話人、広島大学教員 佐々木 宏

念願の安野訪問

11月22日に東広島九条の会が開催した、安芸太田町・安野周辺の中国人強制連行・強制労働の旧跡を訪ねるフィールドワークでは、ガイドをおつとめくださった『広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会』（以下「継承する会」）の川原洋子さんと栗栖薫さんに大変お世話になりました。本当にありがとうございます。ここではそのお礼の気持ちを込めて、フィールドワークの報告をさせていただきます。

はじめに、東広島九条の会や私にとっての、このたびの安野訪問の思いを説明しておきます。今回の訪問は、当会が毎年秋に開催している平和に関するフィールドワークの一環です。これまで、大久島の旧軍毒ガス施設跡、呉の旧海軍跡、似島の旧軍跡と被爆跡などを訪問してきました。実は、会内ではずいぶん前から「安野の中国人強制連行の旧跡を」という声があったのですが、なかなか実現できないでいました。それが、ひょんなことから「継承する会」の方とご縁がつながり、今年やっとその思いが叶ったというわけです。

また、個人的なことを申せば、このたびの安野訪問は、私にとって「ふるさとの古傷」と向き合う機会でもありました。安佐北区で育った私にとって、可部から加計にかけての太田川は子どもの頃の遊び場として慣れ親しんだ場所です。当時はまったく知りませんでしたが、大人になり、太田川上流の電源開発の多くが朝鮮半島や中国大陸の人々の動員によって戦時下に強行されたものだったと知り（皆さまが支援しておられた安野の裁判等のニュースがきっかけだったように思います）ショックを受けました。あの見慣れたのどかな風景に、そんな痛ましい記憶があったとはという驚きです。その時以来、いつの日か安野の「痛みの記憶」にきちんと向き合いたいと考えていました。

フィールドワークに向けて

フィールドワークの事前準備として、10月17日に開催された『西松安野友好基金運営委員会』による追悼式典に寄せていただきました。フィールドワークの下見を目的としたものでしたが、式典やその後の善福寺での法要に参列し、70年前の出来事が、いかに大きなダメージを中国人労働者とその家族に与えたのか、そして傷を癒すことあるいは和解にどれほどの時間や苦労を要したのかといったことについて、いろいろと考えさせられました。

引き続き10月末に、「継承する会」と私たちをつないでくださった広島大学特別研究員の楊小平さんをチューターとした「事前学習会」を開催し、フィールドワーク参加予定者とともに安野関連の本（『中国人被爆者・癒えない痛苦』明石書店、『中国人強制連行』岩波書店）を読み、ディスカッションをしました。この学習会では、安野から移送された中国人の方が被爆死した西警察署の跡地（広島市中区大手町1丁目）には、現在、広島県民文化センターが建っていることを初めて知ったのですが、私はこの事実には不思議な縁を感じたものです。というのは、ちょうどその頃、広島県民文化センターを会場にした学術イベントの企画をしていたからです。11月上旬開催のそのイベントの際には期せずして、中国人被爆者の方に思いをはせることとなりました。

フィールドワーク当日

11月22日はまさに小春日和で、格好の外歩きの日でした。参加者は東広島九条の会関係者7名です。13時に安野発電所側の「安野 中国人受難之碑」前に集合し、碑周辺の坪野地区からスタートとなりました。はじめに川原さんから碑建立の経緯をうかがい、次いで安野発電所の上部部分まで登り、発電所建設当時、中国の人々が強いられた過酷な労働について解説をいただきました。ここで私にとって印象的だったことは二

つあります。まずは、安野発電所建設に動員された中国の人々のすべてのお名前が碑に刻まれていること。これはとても大切なことだと思います。何百人という「乾いた数字」よりも、〇〇さん、△△さん、××さん……という一人ひとりの個性をもった人々がここでご苦労をされたという事実が切実に伝わってきますので。次いで印象的だったのは、導水トンネル出口までの急な山道でした。川原さんによれば、当時の中国の人々のなかには裸足の方も多かったとのこと。息が切れるほどの急坂を、しかも当時は舗装などされていなかっただろう道を、裸足で毎日何往復もしていたかと思うと胸が痛みます。

坪野地区の次は、光石の土出し場へ移動です。ここでは残念なことに土出し用のトンネルの中には入ることができませんでしたが、数十メートル先に確かに導水トンネルが走っていることをリアルにイメージできる場に立てたのはよかったと思っています。その後、津浪地区と香草地区の「収容所」跡を見学しました。香草地区では、現在、杉林となっている「収容所」の



脇で、かつてその場に居合わせた栗栖さん（写真右端）から、当時の収容所の様子や工事の模様などのお話を聞かせていただきました。目撃者・栗栖さんのお話は、私はもちろんですが、他のフィールドワーク参加者にとってもとても印象深いものだったようです。皆さん、食い入るようにお話を聞いていました。

次いで訪れたのは導水トンネルの取水部にあたる土居の取水口です。ここまで来るともう 16 時を過ぎており、やや日もかげりつつありました。川原さんによれば、他にも見るべきところ、聞くべき話もあるとの

こと。それを聞くと後ろ髪を引かれる思いではありましたが、ここで今回のフィールドワークは終了となりました。

安野訪問を終えて

冒頭で申したように安野は私にとって、かねてより訪問したいと思っていた「ふるさとの古傷」です。今回の皆さんのサポートを受けてその機会に恵まれたことを、とてもうれしく思っております。子どもの頃、なぜか知ることができなかった、ふるさとの負の記憶をこのたび知ることができたのはとてもありがたいことでした。が、同時にとても大きな宿題をいただいたようにも思います。それは、今回、教えていただいた事実を、私自身がどのように他者に伝えていくのかという課題です。

安野訪問前の事前学習では「保守」を掲げる人々の一部の「中国人強制連行」に関する見解も調べてみました。ここでその詳細に触れるつもりはありませんが、彼らの主張は「日本にそうした『痛み』の記憶などない！」というものです。近年、こうした声は徐々に大きくなってきております。このことをふまえると、安野の出来事を、私たちが決して忘れてはならない「痛み」の記憶として、広く世に発信していくことが今求められているといえるでしょう。この宿題はそう簡単なものではないと思いますが、私としては今回のフィールドワークでいただいたものを大切しつつ、九条の会のメンバーとして、また大学教員として試行錯誤をしていこうと思っています。



フィールドワーク終了後、土居取水口で記念撮影